

だるまや百貨店

宮本百合子

青空文庫

一

炉ばたのゴザのこつち側で、たけをが箱膳を膝の前に据え、古漬けの香のもので麦七分の飯をかつこんでいる。

あつち側のゴザの上にはまま母のトラが、帯なし裕せを前垂れで締めた小柄な姿を外の明るい方へねじむけて、口じゅうじじむさい泡だらけにしながらおはぐろをつけている。年は三十そこそこのに銀杏がえしに結び、昔風におはぐろをつけるのであつた。

たけをは炉の自在にかかっている鍋からゆつくり三膳目をよそいながら、裸石じきの流し場へ裸足^{はだし}で立つて、しきりに睡をはいているまま母にきいた。

「みんななるすの？」

「おいさ。おじいさまはおじゅつさん（お住持さんという意味）へおいきなし、新は須田へいて貰うた」

「ふーん」

トラは自分より学問もあり、稼ぎもしている年かさのまま娘には何かにつけて遠慮し、

よその人に向つてたけをさんと呼び、うちでは姉ちゃんあねと呼んだ。
たけをが箱膳をしまうと、トラは内気らしく、

「どう……」

と呟きながら、切戸のよこに据えた機はたへのぼつた。

「きんのうのう、もう上つたのけ?」

「あいさ……早うせんことにや……納めものと講のかけ金で、頭痛してござるわな」

カツシャン、カツシャン。トラはおはぐろをつけた反歛そっぽを見せ、口を開けばなしにした
ような表情で仕事に熱中しはじめた。四年前の恐慌からこの町だけでも相当な機屋が片は
じから倒産し、機械をとめている。広幅ものの輸出羽二重や人絹を織つていたこの山陰地
方の町の機屋は、直接アメリカの恐慌の打撃を蒙つたのであつた。近頃では、大勢織子を
つかつていたような機屋がつぶれる代りに、腐れかかつたような家がガラスをはめた窓を
一つ切つて、その下に借りものの機を据えつけ、カツシャン、カツシャンとやりはじめた。
そんな家が部落の内でさえ二三軒ある。機屋は工場をひらいていたのでは立ちゆかないの
で、織子をつかうより安上りな農家の神さんや娘の内職として少しずつ下うけさせるので
あつた。織子なら日給だが、そうして内職におろせば出来上つた反当りで手間を支払い、

しかもそれを機の貸し貯で小ぎつた。村で現金はそんな手間働きでもしなければ見られない。たけをのうちでも、トラはそれでどうやらバラ銭を握るのであつた。現金と云つたらそれとたけをがうちへ入れてある十五円足らずが一家の収入の全部だ。

たけをは、

「どつこいしょ」

と立つて四月の昼間でも暗い納戸へゆき、勤めに着てある新銘仙の着物を丁寧にたたみつけた。それから洗濯ものをもつて流し場へ下りたが、背中の貝がら骨の横が錐をもみこまれるよう痛く、肩が張つてやりきれない。たけをは、炉ばたの柴置きから割木を一本とつて、それで自分の肩をポンポンはたいた。

「しんどいか?」

「どうしたんやろ……肺病になるかもしれん」

「これ! けつたいなこと云わんものじやわ」

たけをがつとめている町のだるまや百貨店は男の店員百人に対して女店員を二百人つかい、朝の八時から夜は十時まで、一日十四時間という労働であつた。朝八時と云つてもそれはもう客の入る時間で、それまでに店員への訓話があり、たけをのような通勤は六時か

ら起き出してやつとだつた。家へ帰りついて一服して床につくと早くて十一時半。つまり、十七八から二十ばかりの眠たい盛りの娘たちに六時間位しか眠る間がなかつた。四日に一度ずつ今日のように半休があつたが、逆に四日に一度ずつの出番にあたれば売場で倍いそがしい目を見るということになる。ふだん日に当ることが少ないので、切戸の敷居に腰かけ、菜の花の匂いのするそよ風に当つているとたけをは疲れが出てボーッとなつた。カツシャン、カツシャンという機の音が遠く野良につたわつて行つて却つて部落に満ちている静けさを感じさせる。

エツヘン！ 特徴のある祖父さんの咳払いでたけをは目を開けた。やがて父親の岩太郎が帰つて来た。上りげたで草鞋をときながら、

「寄りは何じやつたね」

と祖父さんに訊いている。ポンと炉ぶちで煙管きせるをはたき、

「……東京の宮さんから京都へ御降嫁になるんじやそうな。ついては御殿を二十万円で新築せにやならんそうで、全国の信者が寄進せにやならん 塩梅あんばいじや——」

だけをは眠気がさめた。二十万円……御殿……村のこの暮しのどこからそんな金が出る

のであろう……。父親の岩太郎はむつり黙っていたが、「なんばあてじや？」と聞きかえした。

「きつぱりせんが、マア一俵がとこじやろ」

「…………」

祖父さんは、やがて伏目になり、艶のない貧相な白鬚を片手でしごいて、咳払いをした。それでもみんな黙っている。祖父さんは半ば工合わるそうに半ば当てつけらしく、立つて仮壇の方へ行つた。チーン。かね鉢をならしている。

たけをはその音をきくと腹立たしい気になつて、「ほんまに出さんならんのやろか……」と云つた。

「ふーむ」

この山陰の地方は昔から南無阿彌陀仏が盛で、家の格式や財産を仮壇の大きさではかる習慣がある。仮壇の世話は大抵男がやつた。税で動けぬ上に寺へ年一二包ずつ戸数割で米だの綿その他を納めなければならぬ。この節の暮しになつても、戸数割は元と同じだし、どの年よりも「仮壇さんを売らんうちは」と、見栄をはりあつてゐるのであつた。岩太郎

の身になると、安井どこでは年よりに寺まいりもようせんようになつたと云われるのが口惜しくて、無理に無理をしている。

たけをは自分が一日十五時間も人いきれの裡に精根をつかつて立ちとおし、脚の甲までむくませ、髪のつやさえないようにして僅かの金でもとつて来るようになつてから、寺が勢力をもつて自分らの生活からあれこれとかすめるのがだんだんいやになつた。寺への納めものときくと、むざむざ手のひらを剥いでゆかれるような心持がする。

「寺ときくと、あの 大遠忌だいおんき思い出してぞつとするわ」

「ほんになア……、あのときはえらかつた」

永平寺の大遠忌のとき、だるまや百貨店では一日十万人の客が入つたといわれた。客の中では上氣のぼせて倒れた者も出たが、それがすむと病氣になつてやめた女店員がたけをの玩具部だけで三四人あつた。

父親の岩太郎は、あぐらをかいた拇指にはさんで繩をなつていたが、

「この秋の大演習に天皇さんのお宿は永平寺じやそうだ。——あこには天皇さんの長寿祈願の位牌がかざつたるそうな」

たけをは冷淡に、

「ふーん」

と答えた。

「……津田もあの黒子(ほくろ)が曲者(くせもの)じゃ」

繩をよつている掌に唾をして岩太郎がぼそつとつづけた。

「あれも豊田にとり入つて県庁跡の土地をせしめてからグンと芽をふきよつたなあ。……
だるまやのケツは谷中がうずめどるそじやなあ」

だるまや百貨店の表面上の店主は元教員あがりの津田信一だが、資本は市会議長谷中三
太郎が出したということになつていて。しかし、その谷中も実は金を出していたのではな
く、谷中の親分で請負師の石島文吉（これは昔トロツコを押していたのが、県の道路工事
だの建築事業をうけおつては儲け、今では多額納税者となり、貴族院議員となつている）
がやらせている商売なのであつた。

る。信江がポンプによりかかつて、

「ああア」

と晴れた空を見上げていたが、いかにも胸の思いをやると云う眼つきで、

ハアー

島で育てば

娘十六、恋^シころ……

と小声で唄い出した。低いけれども、信江は声自慢で、どこでおぼえてくるのか、いろいろな唄を知つてゐるので人気ものだつた。盤に向つていた加代たちもだんだんつりこまれ、機械的に手を動かしながら一緒に唄ううち、

ハアー

主は寒かる

夜^シこと夜^シことの波まくら

と相当賑やかな合唱になつた。

偶然のようない割烹前掛姿の、七三に結つた幾子が流し場の油障子のところから出て來た。そつちを向いてポンプにもたれていた信江が、ぶつんと唄をとぎらし、おやという

顔をあげた加代に向つて、眉をあげて見せた。

みんな静まりかえつて手ばかり動かし出した。ところへやつて来て、幾子は、「……遠慮なさらないで、うたつて下さい。本当に若い方は声も清らかやからええこと！」

……

小皺がよつてカサツとしたところに水白粉をつけた顔を信江にむけ、

「むかしものやから、この頃の唄はちつともわからんわねえ。……何です今の？」

と云つた。信江は勝氣で憐口そうな口元で笑うばかりで返事しない。加代が、ザーツと盥の水をあけて、

「信江さん、すみません。ちよつと」

信江は救いに舟という様子でにつこりし、ポンプを勢こめて揉みはじめた。津田の細君の幾子はとりつき場を失つたように、乾しものを直したりしながら、さもこの唄を唄えといわんばかりに、琴うたでもうたうような調子はずれの弱々しい声で、

廟行鎮の敵の陣

われの友隊すでに攻む

と、「爆弾三勇士」の歌をうたい、また油障子の方へ去つてゆく。信江がふつと笑いをこ

らえて肩をすぼめた。

「だめエよ、信江さん！」

そういう加代も軽蔑と腹立たしいおかしさで、油障子が閉つてしまふと、

「チツ！」

舌うちをした。

「ああ、しんど！」

わざとらしい高声で、色白のキヌが云つた。それから小声で、

「うるさいなあ。……唄ぐらい何うたつたかて、ええやないの」

だるまや百貨店の寄宿舎は、店主の津田の家に粗末な建てましをした三部屋が寄宿舎としてつかわれていた。五十人ばかりの女店員が寝起きする部屋の一方の窓は、津田の書斎のガラス窓に向つている。だるまやは、儲けるばかりが眼目ではない。皆が一つ家族の心持で、娘と親の心持で、苦しさも喜びもともにわけ、働くことを学び、社会に奉仕させていただくのが眼目であるというので、津田と細君の幾子が寄宿舎も自宅にくつづけてやつてゐるのであつた。

うちにおれば母の手伝いをしない娘や息子はないのだから、嫁入り前の家庭的なしつけ

のためと云つて寄宿舎にいる若い女店員たちは朝は交代に炊事をさせられた。男の小さい店員たちは外まわりの掃除をすることになっている。

毎晩十時すぎ、くたくたになつて皆が帰つてくると、起るとから寝るまで白いエプロン姿の幾子が上り口に娘たちを出迎え、

「大きに御苦労さま」

と挨拶し、

「さあさあ、お湯おゆがええ加減ですよ」

と云つた。飯たきの中婆さんがやどつてあるのに、夜のフロの番は必ず幾子がした。くたびれて帰つた娘たちを慰めてやるのは母親の心づくしだ、と云うのだ。けれども女店員たちは一人としてそれをよろこぶものはなかつた。

一番に津田が入り、次には年が小さくても男の店員たちが入る。それから女店員が時は幾子と一緒に順ぐりで入る。そんな風にして入る風呂がすめば十二時になるのはあたりまえであつた。しかも湯の水が減つてしまつても、ぬるくて心持がわるくとも裸で「奥さん、ちよつとたいて下さい」と、声をかける勇気のある娘たちはなかつた。我慢してしまう。呑氣のんき そなだが鋭い気性のまきが、いつか、フロを出るなり大きくしやみをし

て、

「うまく考えたもんじや！ 一年につもつたらだい分石炭がちがうわ」と云つたのは本当だつた。皆そう思つてゐるのであつた。

今日のような半休でも寄宿舎の女店員たちは通勤とちがつて存分に手足をのばしてふざけることも出来なかつた。外出は二人以上組でないといけない。半休ごとに出かけると女子が、さつきの唄のくちで、何かと当てつけた。

「東京には花嫁学校と云うのが出来たそうですが、皆さん結構じやわ。こうしていて商売の道は覚えてゆくし、社交はお手のものじやし、——当県ではだるまやの寄宿舎にいた娘はんじやつたら理想的な花嫁さまじやと云わせんならんわ。——ねえ」

幾子はもど、どこかの村で裁縫の代用教員をしていたことがあるという話であつた。

寄宿舎の室の内では、襦袢の襟をかけかえている者、声を忍ばせて笑いながら、腕相撲をとつてゐる組。そのわきで、とよ子とサワが、

「あんたおいきよ」

「いやア」

「何故？」

「――知らん！」

さつきから押し問答をしていた。

「ね、こんど私がきつとゆくから、おがむ、かりて来て」

サワが渋々たつて襟もとを直しはじめた。

だるまやの寄宿舎では、女店員たちの室へ新聞さえ置かせなかつた。

「ここにおいてあるから、いつでも読んで下さい」

新聞はキチンと重ねて、幾子の座つている茶の間、女店員たちの室とは狭い廊下一つ隔てた茶の間の茶箪笥の横においてあつた。畳に手をついて物を云つてまで、借りにゆくのが面倒なので、つい女店員たちは何日も何日も新聞さえ忘れて働きに追われ暮すことになるのであつた。

とよ子は、九條武子の石版ずりの色紙を懸けた板壁にもたれ、けつたるい膨ら脛ふくはぎをゲンコでストストたたいた。

「あの――ちよつと」

と云つているサワのよそゆきの声が聞える。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第四巻」新日本出版社

1979（昭和54）年9月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第四巻」河出書房

1951（昭和26）年12月発行

初出：「宮本百合子全集 第四巻」河出書房

1951（昭和26）年12月発行

※執筆は1933（昭和8）年

入力：柴田卓治

校正：松永正敏

2002年4月22日作成

2003年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://wwwaozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆様です。

だるまや百貨店

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>